

Title	鎌倉期足利氏の族的関係について
Sub Title	Family relationships of the Ashikaga Family in the Kamakura Period
Author	小谷, 俊彦(Kotani, Toshihiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.50, No.記念号 (1980. 11) ,p.155- 172
JaLC DOI	
Abstract	The Ashikaga family produced a great many branch families from the end of the Heian period through the Kamakura period. These branch families can be broadly divided into two groups according to their character. One group comprised families such as the Kira, the Shiba, and the Momonoi, who became independent gokenin serving the Kamakura shogunate in the same way as the main family but possessing different territories. The other group comprised families such as the Nikki who remained under the protection of the main house, from whom they received their lands, and were in effect little better than vassals. In this way, relationships of the Ashikaga family developed during the Kamakura period had a lot of influence in various fields in the subsequent Nanbokucho period.
Notes	国史 第五〇巻記念号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0159">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0159</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 鎌倉期足利氏の族的關係について

小 谷 俊 彦

## はじめに

近年、鎌倉時代の足利氏に関心が集まり、臼井信義<sup>①</sup>・桑田浩然<sup>②</sup>・入間田宣夫<sup>③</sup>・福田豊彦氏<sup>④</sup>等のすぐれた論考があいついで発表されている。筆者もさきごろ足利氏について概観を試みる機会をもったが<sup>⑤</sup>、そこでは、本宗家に関する記述のみに終始し、一族關係には触れることが出来なかった。本稿では、前稿の欠を補うために、鎌倉時代の足利氏の一族關係を取り上げることにした。

足利氏一族の場合は、本宗家よりも更に史料が限られており、断片的な史料をもとに推測を重ねていくほかはないのであるが、幸い、すでに佐藤進一氏が、南北朝時代の室町幕府の内部分裂觀応の擾乱に関連して、足利氏一族のあり方について概括的な言及をなされており<sup>⑥</sup>、また、小川信氏が、近著『足利一門守護発展史の研究』の中で、斯波・畠山・細川の三氏について詳細な分析をされている<sup>⑦</sup>。これらの先学の業績に導かれながら、足利一族各氏の所領關係、幕府への勤仕の様態等を模索しつつ、彼等が如何なる状態にあったかを通観してみたいと思う。

## 註

(1) 「尊氏の父祖」(『日本歴史』二五七)

(2) 「室町幕府の草創期における所領について」(『中世の窓』

一一二)

(3) 「郡地頭職と公田支配」(『日本文化研究所研究報告』別巻

六)・「東北地方における北条氏の所領」(『日本文化研究所研究

報告』別巻七)

(4) 「鎌倉時代における足利氏の家政管理機構」(『日本歴史』

三四七)

(5) 『近代足利市史』第一卷第二編「中世」第二章

(6) 『日本の歴史』9『南北朝の動乱』二二三頁～二二六頁

(7) 斯波氏については同書第二編第一章の第一節から第二節に

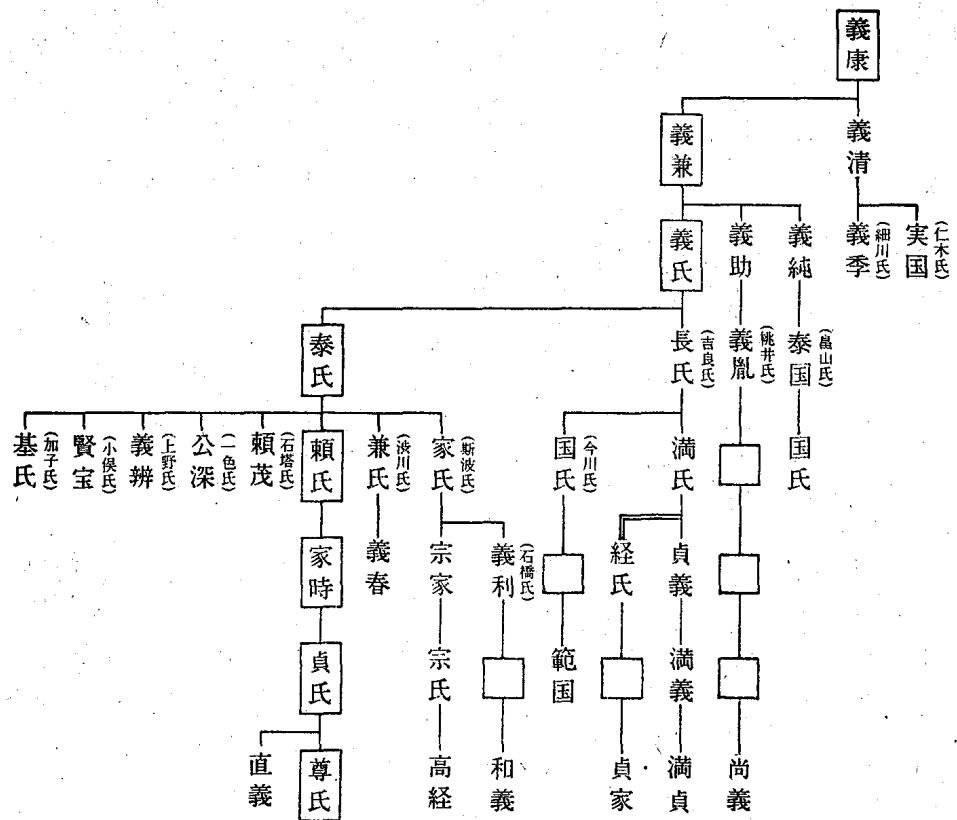
かけて、畠山氏については同じく第三編第一章第一節に、細川氏については第一編第一章第一節に、それぞれ詳しく述べておられる。

一

鎌倉時代の足利庶流各氏の所領に関する史料は極めて乏しく、多くの場合、それぞれの名字を手掛りに推測する他はない。本宗義氏の長子長氏を家祖とする吉良氏は、管見の限りでは、鎌倉時代には吉良の名字で呼ばれず、足利の名字を以って呼ばれており、南北朝時代に至って吉良と呼ばれるようになるが、その名字の地三河国吉良荘については、天福元年(一二三二)頃、本宗義氏の所領であった明証がある。<sup>(1)</sup> また、吉良長氏の子満氏は、文永八年(一二七一)、荘内に禪宗寺院実相寺を建立し、円爾を開山に請じているので、<sup>(2)</sup> 同荘は義氏から長氏に譲られてこの系統の重要な所領となり、やがて名字の地となったものと思われる。

桃井氏は本宗義氏の次兄義助の子義胤より出るとされている。『尊卑分脈』には、義助は承久の乱の際宇治川で戦死し、その子義胤が祖父義兼の子となったとあるが、義助の承久の乱討死については他に所見がなく、また、義胤が祖父の子となったとする説も、同書の義兼正治元年(一一九九)死没の註記と矛盾する。名字の地とされる上野国桃井についても、『吾妻鏡』に建保元年(一二二三)和田合戦の恩賞として藤内左衛門尉に与えられたことが見える他は所見がなく、<sup>(3)</sup> どのような経緯により桃井氏の所領となったかは不明である。この他、南北朝時代に属するが、同氏が上野国新田荘内に所領を持っていたことを示す史料がある。<sup>(4)</sup> この系統は鎌倉末期には上野国御家人として幕府に把握されていたと思われるが、<sup>(5)</sup> 元弘三年(一二三三)新田義貞の挙兵に加わって、以後しばらく新田氏と行動を共にしており、<sup>(6)</sup> 本宗足利氏よりはむしろ新田氏との親近性が指摘出来るであろう。

□は嫡流家



鎌倉期足利氏の族的關係について

一五七

の註記により、美濃国仲北莊・鶉田郷の地頭職を挙げておられるが、これら<sup>(11)</sup>の伝領関係は不明である。この系統は、『吾妻鏡』によれば、本宗義氏の垵飯進献の際などに、泰国、ついで国氏が義氏の子息または孫等と並んで將軍に馬を献ずるなど、幕府勤仕の面で足利一門と行動を共にしている例もみられるが、<sup>(12)</sup>御公事勤仕の面では、足利氏とは別個の賦課を受けており、幕府からは足利氏とは別の独立の御家人として把握されていた。<sup>(13)</sup>

泰氏の二男兼氏（義顯）を祖とする渋川氏の所領については全く所見がない。ただ、『尊卑分脈』は、義顯（兼氏）に「板倉二郎」、その子義春に「荻田小柴相伝之」と註しており、荻田小柴は所在地不明であるが、板倉は下野国足利莊板倉に比定できるので、兼氏は本宗家からこの地を譲られたとも考えられる。

足利氏から最も早く分出した仁木・細川両氏の名字の地は三河国額田郡の仁木郷・細川郷であるといわれている。両氏の鎌倉時代の所領について、同時代史料からの所見はないが、南北朝時代の史料からは、両氏の鎌倉時代の所領と推定できるものに、仁木氏の下野国足利莊町・村上・荒萩・産河の四か郷<sup>(14)</sup>、細川氏の阿波国秋月莊三分一<sup>(15)</sup>が検出される。

泰氏の晩年の子供達から出た諸氏のうち、名字の地が明らかなのは一色・小俣・加子の三氏である。一色氏の祖公深は山伏になったが、吉良氏庶流の今川基氏の姉婿となり、吉良莊の一色を譲られて一色を称し、<sup>(16)</sup>小俣氏は足利莊小俣郷の真言宗寺院鷄足寺の別当職を相伝したので小俣の名字で呼ばれるようになった。加子氏の場合は足利莊加子郷に住んだので加子と称したものと思われる。仁木・細川以下の家々の所領乃至名字の地は、一色氏を除き本宗家所領内に含まれている。

一方、足利本宗家所領については、著名な倉持文書「足利氏所領奉行注文」によって鎌倉末期の所領のほぼ全容が知られ、その経営の実体もかなり明らかにされてきている。<sup>(17)</sup>その特質のみを摘記すると、本宗家は上総・三河の守護職のほか約三十五個所の所領を有し、その所在国は、推定分を含めると、北は陸奥から南は九州筑前まで十七か国に散在し、皇室を初めとする権門領莊園のほか、郡や郷などの国衙領もかなりの数にのぼる。所領の管理支配の面では、当時の御家人層の中にあっては異例ともいえるべき方式を採用している。すなわち、郡・荘内の郷を最末端として、各郷に郷司・地頭代を

配し、下野国足利荘や三河国額田郡の如き大規模所領には公文所を置いて管内の郷司や地頭代の統率に当らせ、一郡・一荘全体のことをつかさどらせた。さらに、鎌倉には政所<sup>(18)</sup>を置き、執事や奉行人を任じて、それぞれ家務の統轄や所領等の事務を分掌させていた。そして、執事から郷司・地頭代に至る各段階には高・上杉をはじめとする本宗家被官が任用・配置され、全体として整然とした所領の管理支配を行っていた。この所領管理支配組織には、特に国衙領の場合、旧来の国衙行政組織の末端を支配下に置き、それをそのまま利用することもあったであろうが、むしろ多くの場合、旧来の機構を漸次換骨脱胎して独自の機構を創出する方向に進んでいたものと思われる<sup>(19)</sup>。従って、機構の整備が進められたり、また特に新たに所領を得た場合には、多くの人員が必要となり、譜代被官のほかに、新しい被官の獲得が要請される。その際、没落御家人から在地の新興武士層までの広範な階層を足利氏本宗家の下に被官として組織し得るという点で、鎌倉中期以降の、特に蒙古襲来後の社会情勢の変化に即応し得る体制であったということができる<sup>(20)</sup>。また、この所領支配を核とする被官組織は、有事の際には、そのまま容易に軍陣組織に転化させ得るものであったであろうから、その点でも、未だ惣領制的同族結合の殻を捨てきれない他の御家人に比し、一步先んじた体制であったといえる。

足利本宗家のこのような所領管理支配のあり方が北条得宗家のそれと類似することは既に指摘されており<sup>(21)</sup>、この事實は否定できないが、両者の間には相違点も見出すことができる。足利氏においては、一旦被官に給付された所領所職は、罪科等特別の理由がない限り、没収されたり改替されたりすることなく、その被官の家に代々伝領されていくのが普通であった。そのため、被官は在地に深く根を下すことができたと思われ、なかには在地における二次的封建関係の設定を推測し得る場合すらある<sup>(22)</sup>。これに対し、北条氏の場合、陸奥国津軽・糠部など鎌倉初期以来の所領では得宗被官が在地に根を張っている例もみられるが、それ以外ではむしろ給主（地頭代・郷司）のひんばんな交代が見受けられ<sup>(24)</sup>、この方が北条氏の一般的な方式であったように思える。しかも、これら浮草的な給主達は得宗権力をかさに非法押妨を行い、在地との対立を激化させているのである<sup>(25)</sup>。

以上、足利本宗家所領の特質を述べたが、所領の如上のあり方は、同族結合による所領支配方式を拒否する方向をとるものと思われる。そこで今度は既述の庶流各氏の所領乃至名字の地と本宗家所領との関わりを見てみよう。なお、畠山・桃井の両氏は、すでに述べたように、他の諸氏とはやや性格が異なるのでここでは除外しておく。

吉良・斯波など有力庶子家と目される家の場合には本宗家所領との間に地名の重複が見られない。このことは、吉良・斯波等の家々が本宗家（父または祖父）から各別所領の譲与を受けて、全く独立した所領経営を行っていたことを示している。これらの庶子家に共通しているのは、分出の時期が足利氏の幕府内部で重んじられ最も栄えた十三世紀前半頃であることと、それぞれの家祖が本宗義氏の子もしくは孫で、本宗家嫡子（泰氏または頼氏）の兄に当たるということである。

一方、仁木・細川・小侯・加子等の各氏は、既述の如く、その所領乃至名字の地が本宗家所領内に含まれる狭小な地であって、これらの家々は明らかに所領支配の上で本宗家の統制を受ける立場にあったことを示している。仁木・細川両氏の祖義清は足利義康の長子で、彼は下野国梁田御厨を相伝領有していたが、治承・寿永の内乱に際し、木曾義仲と結んでその軍に加わり、寿永二年（一一八三）閏十月備中国水島で討死した。彼の所領梁田御厨は、鎌倉の源頼朝の麾下となっていた弟義兼に移り、義清の子孫は零落して本宗家の保護下に置かれ給養を受ける身になったものと思われる。小侯・加子等の家は本宗頼氏の弟達の系統である。彼らの父泰氏は建長三年（一二五一）十二月、無断出家の咎によって所領を没収され、以後約二十年間退隱の生活を送る。この泰氏の晩年の子供達が世に出る頃にはすでに父も兄頼氏も死去しており、本宗家では彼らの甥にあたる幼少の家時が当主となっていたから、所領を得ることができなかったであろう。彼らの一人一色氏の祖公深が「山臥にて有しを、基氏姉<sup>(今川)</sup>聳に取し間<sup>(28)</sup>」と伝えられているのは彼らの境遇をよくあらわしている。彼らもまた、仁木・細川氏の場合と同じく、被官同然の身となって本宗家に給養されるか、或は一色氏の場合のように一族に拾われるかするより他に道はなかったであろう。従って彼らの一族内における地位は低く、吉良・斯波等のように御家人の地位を得て幕府に出仕することなどのぞむべくもなかったものと思われる。

註

- (1) 三河国「滝山寺縁起」
- (2) 「聖一国師年譜」
- (3) 同書 建保元年五月七日条
- (4) 正本文書 観応元年十二月廿三日高師直施行状
- (5) 「楠木合戦注文」元弘三年正月、千早城攻略に向かった幕府軍勢の中に大番衆として上野国の山名・高山氏等と並び「足利藏人二郎跡」がみえる。足利氏歴代中藏人を称したのは義兼『吾妻鏡』元暦元年八月八日条ほかであるから、藏人二郎を義兼の二男義助に比定し、これを桃井氏とした。
- (6) 『太平記』卷十 新田義貞の旗上げに加わった一人に桃井尚義が見える。
- (7) 同氏前掲書三六一頁～三六七頁
- (8) 註(1)に同じ。
- (9) 右に同じ。
- (10) 家氏の父泰氏は後述のように建長三年罪を得て所領を没収され籠居するので、その後彼が義氏より所領の譲与を受けたとしても、一期領主としてであったと思われる。また、今日知られる限りでは、足利氏の譲状は伝存せず、所領安堵の將軍家政所下文がただ一通伝わっている。それは伊勢徹古館文書建長六年十一月十七日付で、内容は、密厳院阿闍梨寛玄に祖父義氏の同年十月廿九日譲状に任せて美作国埴和西郷地頭職を安堵したものである。この例に見られるように、所領は義氏から、泰氏をとび越えて、孫に譲与されたものと思われる。

鎌倉期足利氏の族的関係について

- (11) 同氏前掲書六二六頁
- (12) 同書 嘉禎三年四月十九日条、仁治二年正月二日条、建長二年正月二日条、建長三年正月三日条、建長六年正月二日条
- (13) 『吾妻鏡』 建長二年三月一日条、「弘安四年鶴岡八幡遷宮記」(続群書類従)
- (14) 鶏足寺文書 文和二年十二月十二日足利基氏御教書
- (15) 細川家文書 かきやうくわねん十一月廿六日細川頼有譲状
- (16) 『難太平記』
- (17) 前項註(2)・(3)・(4)・(5) なお、佐藤進一氏が近著『足利義満』(『日本を創った人びと』11)一〇頁～一一頁で簡潔に要約されている。
- (18) 福田豊彦氏はこれを奉行所と呼んでおられる。前項註(4)
- (19) 例えば三河国額田郡沙汰人余三太郎跡給田畠が鹿島宗実↓娘細川和氏妻↓孫細川和氏娘へと譲られている(臨川寺重書案文坤)のは、本来沙汰人の職務に付随していた給田畠が単に得分権のみになったことを示している。従ってそこに沙汰人に代わる職務遂行機関の存在を推定し得る。
- (20) 足利氏のこのような所領管理支配方式は尊氏が後醍醐天皇から給わった元弘新恩地においても採用された。これらの所領には被官が給主として配置されたほか、武蔵国安保氏の庶流安保新兵衛尉が尊氏から信濃国小泉庄内室賀郷地頭職に補任された(安保文書 元弘三年十二月廿九日足利尊氏袖判下文)例が知られている。従って尊氏の新所領(二十か所、弟直義分を加



えると三十五か所）獲得に伴い、没落御家人や旧北条氏被官が多数足利氏の下に吸引され、被官もしくはそれに準ずる者が大幅に増えたと考えられる。

(21) 前項註(3)

(22) 貞和五年頃、高師泰の河内守護在任中、その守護代に岩堀中左衛門尉がいる（妙心寺文書 貞和五年五月廿五日高師泰遵行状案）が、岩堀氏は三河国額田郡岩堀の土豪出身と思われる、郡内の有力給主であった高氏（惣持寺文書）の被官となっていたものと想定される。

(23) 前項註(3)

(24) 奥富敬之氏「鎌倉北条氏の族的性格」〔史学 論集 対外関係と政治文化 第二〕

(25) 例えば若狭国惣田数帳写（東寺百合文書ユ）。得宗被官塩

飽新右近等の権力を背景にしての横暴振りがうかがえる。

(26) 「久志本常辰反故集記」永暦二年五月一日官宣旨案

(27) 前掲拙稿参照。

(28) 『難太平記』

二

前項では足利氏の一族関係を主として所領領有の面から述べた。この項では幕府に対する奉仕、特に番役（軍役）勤仕と御公事勤仕の面から考えてみたい。そこでまず『吾妻鏡』によって足利氏一族の幕府出仕についてみることにする。<sup>(1)</sup> 次掲の表は一族各人の活動状況を示すため、行論上必要な部分のみを取って、便宜的に十年きざみにAからFまでの六期に分けて図示したものである。A期（建暦元〜承久二）では足利氏の幕府出仕者は義氏一人であるが、B期（承久三〜寛喜二）の終わり近く安貞二年（一二二八）になると義氏の長子（吉良）長氏が出仕を始める。C期（寛喜三〜仁治元）になると、義氏の嫡子泰氏が嘉禎二年（一二三六）に、翌三年には一族畠山泰国が現われ、義氏・長氏と相並んで活動を始めると、ついでD期（仁治二〜建長二）には、寛元元年（一二四三）を最後に（吉良）長氏の名が見られなくなる反面、翌年に畠山泰国の子国氏、翌々寛元三年には泰氏の長子（斯波）家氏・次子（渋川）兼氏が同時に加わって、足利氏の三代代と畠山氏二世代が相並ぶ。E期（建長三〜文応元）は、その初年に泰氏が無断出家事件をおこして退隠するが、翌建長四年には（吉良）長氏の子満氏、続いて泰氏の嫡子頼氏が出仕を始める。一族の出仕状況からみると、D期からこのE期の

『吾妻鏡』にあらわれた足利氏一族の活動状況

	A	B	C	D	E	F
年代 一族	1211~ 1220	1221~ 1230	1231~ 1240	1241~ 1250	1251~ 1260	1261~
本 宗 家	(足利) 義 氏	義 氏	義 氏 泰 氏	義 氏 泰 氏	義 氏 泰 氏 頼 氏	頼 氏
吉 良 氏		(足利) 長 氏	長 氏	長 氏	満 氏	満 氏
斯 波 氏				(足利) 家 氏	家 氏	家 氏
渋 川 氏				(足利) 兼 氏	兼 氏	
畠 山 氏			(畠山) 泰 国	泰 国 氏	泰 国 氏	泰 国 氏
仁 木 氏			(日記) 五 郎		三 郎	
細 川 氏				(細河) 宮内丞?		

鎌倉期足利氏の族的関係について

前半までが足利氏の最盛期で、建長六年になると、長らく幕府内で重んじられ一族の中心でもあった義氏が死去し、(渋川)兼氏も康元元年(一二五六)を最後に名を見せなくなる。F期(弘長元々)に入ると、本宗頼氏が弘長元年を最後に姿を消す(翌年没)<sup>(2)</sup>。『吾妻鏡』はこの後、弘長三年まで(吉良)満氏・(斯波)家氏・畠山泰国・同国氏の動静を伝え、文永三年(一二六六)でその記述を終えている。

この間の彼らの活動では、鶴岡社参をはじめ諸所への将軍出行の際に随兵以下の供奉人の役を勤めたり、本宗義氏、堀飯進献にあたり引出物役人とか馬を献ずる役を勤仕する等の事例が多い。その他では、建長二年(一二五〇)十二月、将軍頼嗣の近習番改編にあたって本宗泰氏・頼氏父子、畠山泰国・国氏父子が番衆に加えられ、ついで将軍宗尊親王東下に伴い新規番衆が設けられると、建長四年四月、格子上下番に(渋川)兼氏・(吉良)満氏、正嘉元年(一二五七)十二月の廂番に頼氏と(吉良)満氏が加わっており、ついで、同月の格子上下番改組で頼氏が格子番となり、文応元年(一二六〇)正月、昼番が設けられると

(吉良) 満氏が、さらに同年二月廂番の改編により頼氏・(吉良) 満氏が廂番に、それぞれ重複して名を列ねるなど、選ばれて將軍御所内の種々の番役を勤めたことが知られる。なお、C期とE期にそれぞれ日記五郎・日記三郎の名が見られ、仁木氏の族人と思われるが、彼らは本宗義氏の埵飯進献の際、高・大平など本宗家被官の有力者とおぼしき者と並んで馬の後を牽く役を勤めており、<sup>(3)</sup>これらの事例は仁木氏の足利氏一族内での地位を示すものとして注目に値する。

御家人にとって、御所内諸番役はもとより、將軍出行の際の供奉人に選ばれることは名誉なこととされたが、これらの役を勤仕する者は、大番役などと異なって、在鎌倉人ともいうべき特定の東国御家人の中から選ばれたこと、彼ら特定御家人はその名前を小侍所番帳に記載されたが、それも、一家の惣領のみでなく、庶子・一族も一人として記載されたりすることが、五味克夫氏によって明らかにされている。<sup>(4)</sup>従って、吉良・斯波等足利氏庶流が右のように本宗家の人々と並んで供奉人に選ばれ、また御所内番役を勤仕しているからといって、単にそのみを以って直ちに彼らが個々に幕府に把握され全く独立の御家人となっていたと解することはできない。たしかに、前項でみたように、所領の面では本宗家の統制を受けることのない吉良・斯波等庶流が右の如き特定御家人の地位を得ることにより、一族内での立場を有利にし独立性を強めていくことは疑いようがないが、彼らを本宗家とは別個の独立の御家人として把握するか否かは幕府の決定することである。

幕府は御家人に対し、京都大番役等軍役や関東御公事の賦課にあたって、一族を単位として惣領に庶子を率いて勤仕させる方式を採っており、蒙古襲来後の徳治年間、鎮西で定められた「庶子惣領可相並」<sup>(5)</sup>との法令すら旧来の方針に反するものでなかったことは、すでに瀬野精一郎氏が明らかにされている。<sup>(6)</sup>寛元元年(一二四三)、橘薩摩入道跡の人々が相論によって所役を対捍した際、幕府は薩摩十郎を惣領と認め、一族を催し具すべきことを命じた例<sup>(7)</sup>などにみられるように、一般的には全くこの通りであったと思うが、その一方では、有力御家人の一族庶子を惣領の統制下から引き離し、彼らを独立の御家人として把握することもあったと思われる、一族が各別に軍役を勤仕している例が間々見受けられる。『経俊卿

記』所載建長五年（一二五三）法勝寺供養守護武士交名注進状に<sup>(8)</sup>

南大門

出羽二郎左衛門尉 隱岐三郎左衛門尉 武田・小笠原之外、可相具甲斐国大番衆、鎌田兵衛入道 同三郎入道

大見河内守

西二階門

因幡守 周防前司入道 大宰少貳

西北門

武田一門人々 嶋津大隅前司<sup>(忠時)</sup>

北門西脇

小笠原一門人々 豊後四郎左衛門尉<sup>(島津忠綱)</sup> 同三郎左衛門尉<sup>(島津忠直)</sup> 同四郎 同十郎

（下略）

とあって、甲斐国大番衆武田・小笠原の両氏が「一門人々」として一族単位で記されているのに対し、島津氏は惣領忠時以下一族五名が個々に記載され、しかも惣領と一族は別々の門の警備に当たっている。また、鎌倉末期の史料であるが、「光明寺残篇」の元弘元年（一三三一）幕府上洛軍の編成表に部将として列記された人名中、(1)「千葉介<sup>一族并伊賀国</sup>」・「千葉太郎」、(2)「小笠原五郎<sup>阿波国</sup>」・「小笠原信濃入道<sup>一族</sup>」、(3)「足利宮内大輔<sup>三河国</sup>」・「足利上総三郎」と、一族相並ぶ例が見られる。(1)の千葉氏の場合、一族の太郎は惣領千葉介の統率下に属さず、幕府から独立の存在としてとらえられていたことを示している。このことは、同史料の同年十月十五日楠木城攻略軍の配置において、惣領千葉介が八幡より佐良々路に向かった軍勢の一員であったのに対し、千葉太郎は宇治より大和路に進んだ一手に属して、両者が別行動をとっていることから確かめられる。(2)の場合は、小笠原惣領信濃入道が一族を率いたのに対し、五郎は阿波守護として管国御家人を<sup>(9)</sup>

統率し、職務上当然ながら惣領とは別行動をとったと考えられる。(3)は足利氏の場合であるが、宮内大輔を治部大輔の誤りとする<sup>(10)</sup>と本宗高氏(尊氏)となり、宮内大輔の官名を正しい記載とすると吉良氏の傍流貞家に比定でき、いずれとも決し難いが、上総三郎(吉良満貞カ)が独立の御家人としてとらえられている事実は動かすことができない。

有力御家人の一族で、小侍所番帳に記載されるほどの者の中には、惣領の羈絆を脱し独立化を志向する者も多かったにちがいない。幕府にとって、このような一族を惣領の統制下から解放し独立の御家人とすることは、有力御家人の力を殺ぎ、彼らを抑えていく上で有効な方法となり得たから、積極的に、政略として進められる場合もあったに違いない。文永三年(一二六六)、幕府は小早川氏惣領茂平代官重兼と庶子竹王丸との相論を裁許して、惣領が惣地頭と号して竹王丸の所領に相交わるのを禁止し、関東御公事においても各別勤仕を申渡し、庶子竹王丸の惣領からの独立を認めているのは、その好例である。しかし、このような庶子の独立御家人化は幕府の恣意により自由に行い得たわけではなかった。それが可能であったのは、庶子が各別所領の譲与を受けており、しかもその際、「(惣領)しきふの大夫のめいにあいしたかい<sup>(13)</sup>て、ちきやうすへき」とか、「至于庶子等者、就万事可致支配、若及異儀庶子出来者、為惣領時宗可令領知之<sup>(14)</sup>」といった本主の遺戒等の条件が付せられていない場合だけであつたであろう。本主から条件が付せられている場合には、本主の遺志が尊重され、幕府といえどもこれを無視することはできなかったからである。豊後の大友氏が、族内に惣領の統制から離れて独立性を指向する庶子を抱えながら、大友惣領——庶子——小庶子の惣領制的結合を鎌倉末期まで保つことができたのは本主能直・尼深妙の遺戒によるところが大きかったと思われる。

以上、有力御家人の一族の中には独立の御家人となり、惣領とは各別の軍役勤仕を行う者のあつたことを述べ、足利氏では吉良氏が軍役勤仕の上で別個の行動をとっていたことを指摘した。つぎに、御家人にとって軍役と並ぶ重要な義務であつた関東御公事についてみることにする。現在、幕府の御公事賦課については、主として『吾妻鏡』建長二年三月一日条「閑院殿造宮雑掌目録」の内容をもとに、幕府は、鎌倉初期のある時点で掌握した御家人をそれぞれ一つの奉公単位と

みなし、その惣領を通じて分出する庶子を統一する体制を鎌倉末期まで保持したとする考えが定説化している。よく知られているように、この目録には、造営費負担者が「何某跡」・「某人々」・「何某」の三形式で記載されており、何某跡はその御家人の父祖何某の代にその所領が奉公の一単位として把握されたもの、某人々は祖先が一個人でなく複数の形で把握されるような一族、何某は建長二年当時の一人物をさすものといわれている。<sup>(16)</sup> 念のため、右の説の重要な論拠となっている目録中の「何某跡」のうち人名の明らかなもの五十七例について、『吾妻鏡』により、それぞれの死没年もしくは活動最終年を拾い出してみると、元久以前が十三例、承久前後十四例（源氏将軍時代十六例）、残りはそれより後年で、しかもその半数の十五例は仁治・寛元年間に集中しており、前後の開きは約五十年に及んでいる。したがってこれらの御家人が御公事賦課の単位として把握された時期は区々であったことがわかる。それに、建長二年当時現存の人物が一単位として把握されており、さらに、中には兄弟・伯父甥等一族で二人が別々にとらえられている例も数例見受けられる。<sup>(17)</sup> もともと、この閑院内裏造営費賦課には先例があつて、建暦度の造営、寛元度の修理に続く賦課であり、<sup>(18)</sup> このような臨時公事は大体において先例に則るのが普通であろう。この建長度の賦課に際しても、同目録に関する地の文に「云本役人、云始被付分、今日悉被注絹之」とあり、先例に従つて賦課された御家人と、今回初めて賦課された御家人があつたことを知りうる。

御公事賦課は幕初より行われ、御家人は父祖以来御公事を勤仕してきたのであるから、この建長二年の目録において、幕府から御公事勤仕の単位として掌握された時期が御家人によつて異なったり、一族で二人が相並ぶのは、父祖の代とは違った編成がなされたことを示しており、幕府は軍役勤仕の場合同様、機会をとらえ、御家人一族の状態に対応して、御公事賦課単位のとらえ直し・編成替えを行ったものと思われる。島津惣領久経の弘安四年（一二八一）四月十六日讓状に「みくうしハ、こ入道の時、まんところよりさためくたされたるしやうをまほるへし」<sup>(19)</sup>とあつて、久経の父忠時の時に政所より御公事について定め下されたと述べているのは、御公事賦課単位の編成替えが行われたことを物語るものではなからうか。島津氏においては、前掲建長五年法勝寺供養守護武士交名注進状にみられる如く、惣領忠時の世代に庶子の独立

化が進められたと考えられ、中でも忠時の弟忠綱の系統は代々有力在京人として史料に名をあらわしている。<sup>(20)</sup> 島津惣領家では、その後は、讓状や置文に「御くうしようとうの事、そりやうのふんけんをさためをかれをハぬ、しかるをかのふけにつきて、はいふんの御くんしをたいかんせんともからあらんにおきてハ、そのりやうハひさ時ちきやうすへし」「きやうとおうはんの事、ひさ時かさいそくにしたかひて、一ミとうしんにあひつとむへし、もしそりやうひさ時かけちをそむきて、たいかんのともからあらハ、そのちきやうのふんをハ、ひさ時これをちきやうすへし」<sup>(12)</sup> など強い戒句が見られるようになり、御公事も大隅入道（忠時）跡として賦課されたようである。<sup>(22)</sup>

建長二年「閑院殿造宮雜掌目録」には、足利一門では、本宗義氏（小御所）・畠山泰国（築地二本）・細川宮内丞（築地一本）の三名が記載されている。畠山氏は伝えられるところの家<sup>(23)</sup>の起りからして特殊な一族といつてよく、前述したように、足利氏とは別個の御家人として幕府から遇されていた。細川氏は前述の所領の領有形態や、特に後の南北朝時代における同氏の地位から推して、独立の御家人とはみなし難く、筆者はこの細川氏を足利系以外の細川氏か、或は誤記と考えたいが、小川信氏は、同時代に足利系以外の御家人細川氏が見出されないところから、一応足利系細川氏に措定され、同氏が独立の御家人としての身分を認められていたことになるとされながら、断定は差し控えておられる。<sup>(24)</sup> ほかに足利氏の御公事勤仕に関する史料として「弘安四年鶴岡八幡遷宮記」<sup>(25)</sup>があり、これによると足利氏は「足利入道殿跡」として楼門の費用を負担している。足利入道は義氏を指すと考えられるから、畠山・桃井の両氏を除き、吉良・斯波をはじめ一族が本宗家時に寄合つて勤仕したことになる。しかし、この場合もまた、臨時の御公事であり、先例によって賦課がなされたと考えられるので、恒例御公事の勤仕にそのままあてはめることはできない。先の閑院内裏造宮費賦課にあたって、「千葉介跡」として西対の費用負担を命ぜられた千葉氏惣領平亀若丸が「建曆御造宮□祖父成胤之時也、至亀若丸者、僅雖有嫡家相伝之名、致□分所領面々候之間、所被仰下候之御公事等、有催促之□、希勤仕之輩也」<sup>(27)</sup>と述べているのは、この間の事情をよく物語っている。なお、右の鶴岡八幡宮造宮に際し、摂社熱田宮の造宮費の一部を負担した結城氏の場合、先

の閑院内裏造営では上野入道（朝光）に賦課されたのに対し、今回はその子大蔵少輔入道（朝広）に賦課がなされており、上野入道跡に含まれる彼の兄弟等は除かれている。このことは幕府の公事賦課が必ずしも固定的ではなかったことを示している。このような例から、足利氏の場合、軍役の上で本宗家と各別に勤仕した吉良氏等は、御公事の面でも通常は各別勤仕であったと考えたい。

### 註

- (1) 以下の記述で『吾妻鏡』による場合は、特別なものは除き一々註は付さない。
- (2) 栃木県足利市吉祥寺霊牌及び前項註(1)。
- (3) 『吾妻鏡』嘉禎三年四月十九日条、建長六年正月二日条
- (4) 「鎌倉御家人の番役勤仕について」一・二（『史学雑誌』六三・九・十）「鎌倉幕府の番衆と供奉人について」（『文科報告』七史学篇第四集）
- (5) 実相院文書 正和元年十一月廿二日鎮西探題裁許状
- (6) 「惣領制の解体と鎌倉幕府」（『九州史学』六）
- (7) 橘中村文書 寛元元年九月六日関東御教書案（『鎌倉遺文』六二三五）
- (8) 同年十一月十四日条（『鎌倉遺文』七六四一）
- (9) 佐藤進一氏「光明寺残篇小考」（『増訂 鎌倉幕府守護制度の研究』）
- (10) 右に同じ。
- (11) 「建武年間記」所載関東廂番結番交名の三番に「宮内大輔貞家」とある。
- (12) 小早川家文書之一 文永三年四月日関東下知状  
鎌倉期足利氏の族的関係について
- (13) 志賀文書 弘長元年十一月八日尼深妙置文
- (14) 皆川文書 寛嘉二年八月十三日長沼宗政讓状
- (15) 石田祐一氏「惣領制度と武士団」（『中世の窓』6）・羽下徳彦氏『惣領制』なお、本文の記述は『惣領制』一〇四頁～一〇五頁によった。
- (16) 石田氏前掲書
- (17) 河越重時（次郎）・同重員（三郎）が兄弟、二階堂行村（隠岐入道）・同行盛（信濃民部入道）が叔父甥、波多野忠綱（中務）・同盛高（弥藤次郎左衛門尉）が大伯父と甥、伊賀光宗（式部入道）・同季村（判官四郎）が叔父甥である。
- (18) 中山法華経寺所蔵日蓮筆雙紙要文九裏文書 建長元年五月廿七日平亀若丸請文案（『鎌倉遺文』七〇七九）
- (19) 島津家文書之一 島津久経自筆讓状
- (20) 佐藤進一氏「室町幕府開創期の官制体系」（『中世の法と国家』）に詳しい。今その系譜関係を示すと、忠綱——忠景——忠宗——忠秀となる。
- (21) 島津家文書之一 ふんえい八年九月十五日島津道仏時忠誠状案
- (22) 『薩藩旧記雜錄前編』卷八 弘安元年七月卅日関東御教書





より、<sup>(吉良)</sup>長氏の少年の御時、装束料に給ひしを、吉良庄惣領進退すべしと沙汰ありし故に、<sup>(今川)</sup>基氏不会になり給ひしにや、故<sup>(今川範圍)</sup>殿の御代に省観上総入道合躰有て、父子の契約より違乱止き」とあつて、惣領吉良氏が今川氏所領に対する支配権を主張したことから両者は不和となり、対立が続いたが、範圍の代になって、惣領貞義と父子の契約を結んだので、惣領の干渉がなくなつたと述べているのも、惣領が庶子所領に対して強い統制力を及ぼしていたことを裏付けている。

所領面における吉良惣領の統制力の強さは軍役等の勤仕の際にも發揮される。建武二年(一三三五)、足利尊氏が建武政府に反旗をひるがえすと、吉良氏も本宗に協力したが、同年十二月、敗走する官軍を追つて上京した時に味方に加わつた武士達の軍忠状が残されている。その一つ、本間有佐軍忠状に「奉属于大將軍足利上総宮内大輔殿御手」<sup>(吉良貞家)</sup>り所々の合戦で軍忠を抽んでたことを述べ、証判を請うているが、これに証判を与えたのは吉良惣領嫡子満義であつた。<sup>(2)</sup>また、天野経顯は吉良惣領貞義の手に属して戦つて、今川範圍に軍忠の見知を受け、軍忠状の証判を総大将の貞義から得ている。<sup>(3)</sup>したがつて、この段階の吉良氏の軍陣組織は、惣領嫡子満義——庶子貞家、または惣領貞義——庶子今川範圍で、鎌倉時代の軍役勤仕の形式——惣領が庶子を統率して従軍する——をそのまま踏襲していたものであつたのである。以上から、吉良氏は鎌倉末期に至るまで可成り強固な惣領制的一族關係を維持していたことを知り得る。このような一族關係は、恐らく、斯波氏等の有力庶流においても見られたことであらう。

註

(1) 今川文書

(2) 本間文書 建武三年六月日

(3) 天野文書 建武三年七月日天野周防土用王丸代景光軍忠状

むすびにかえて

以上、鎌倉時代の足利氏について、その族的關係を、主として所領及び幕府への勤仕の面を通じて検討した。史料制約もあつて充分とはいえないが、独立御家人化する一族と本宗家に従属し被官化の道を歩む一族の抽出を行い、有力庶流

鎌倉期足利氏の族的關係について

においては、一族間に惣領制的関係が見られたことを指摘した。このような足利一族のあり方は、佐藤進一氏が述べておられるように、南北朝期の政局をより複雑化させることになる。<sup>(1)</sup>足利尊氏は、南朝勢力と対抗し、早急に全国を支配下に置くため、庶流一族を惣領・庶子の別なく国々の大将・守護に起用配置した。この政策は、従来惣領の統制下に置かれていた庶子にとっては独立化の絶好の機会として歓迎すべきものであったが、一方、惣領にとって、庶子をその統制下から切り離されることは、自己の軍事力の低下を招き、与えられた任務の遂行を困難にする。<sup>(2)</sup>このような庶流一族惣領間の利害の対立は、室町幕府政治の二元性と結びつき、観応の擾乱の一因となって、政局の混乱を長期化させることになる。また一族が独立御家人化する場合、幕府の政治的意志が強く働いていたことを指摘するため、幕府の御家人把握が固定的ではなかったこと、御公事賦課単位の編成替えが行われたことを述べたが、考えを充分に展開することができなかった。この点は今後の課題として検討を続けて行きたいと思う。諸先学の御叱正をお願い致したい。

註

(1) 『日本の歴史』9 『南北朝の動乱』二二二頁以下

(2) 小川信氏が、前掲書第二編第一章第二節で、斯波氏の場合について述べておられる。

〔付記〕 小稿は昭和五十二年十月十五日、三田史学会大会において口頭発表したものを補正したものである。